



冬のおしまひ

岩崎 佑太
(東京)

かぜうたふ夜道をゆけり歩かない犬を楽器のやうにだきつつ

野良猫に怪しまれつつ野良人間われはゆくなり東京の夜

さつきまでおそらく母は泣いてゐた ナイフとフォークひかる食卓

かなしみをやらはんとして二十二時 蛇くちなはのごとくものを食ひをり

あけがたの津軽りんごに強き意志ありてますます赤くつやめく

まへを行く人のビニール袋より透けて見えたり「極旨」の文字

売る本と売らない本を分けてをりヴィヴァルディ「冬」なりひびくなか

いらぬ本三百冊を運ぶなり臍せいか下丹田たんでんに力をいれて

しらゆきは天よりふれりはじまりよりおしまひといふ言葉うるはし

人生のおしまひにたぶんゐてくれぬ犬をなでをり黒き毛なみを

人生に飽き飽きしたといふごとし学生ら冬のキャンパスゆけり

自殺する気もちわからぬといふ人を羨しくおもひあはれとおもふ

いくたびもうまればかりて祖父はけふわれをつつめる寒のゆふやけ

さみどりの印度更紗にくるまれて幾千年をうたたねしたし

チエーホフに読み耽りつつ手袋の右手をなくす冬のおしまひ

このごろの私

これまで圧倒的に犬派だったが、小島ゆかり著『サイレントニャー』（短歌研究社）を読んで、猫の魅力に気づかされた。日課である犬との散歩中、猫に会えるとうれしくなる。



海へゆく

秋山 幸子
(千葉)

このごろの私
麴の魅力にとっぷりとはま
っている。甘麴に始まり、塩
麴、醤油麴、和だし麴、納豆
麴、黄柚子胡椒麴など。無条
件でおいしさのステージを格
上げしてくれる幸せを、日々
存分に楽しんでいる。

銚子まで特急「しおさい」に乗らんとすバケットシートとみまがふ席に

早春の銚子電鉄にゆられきて犬吠埼の灯台めざす

灯台の九十九段のぼりたり地球のまるさを確かめるため

波の背を見ながら揺れるハンモックわれと君とで銚子プリン食む

東映の映画のはじめに流れたる荒波に会ふ犬吠埼で

強風で着陸できぬかもしれぬ八丈島へわれは飛び立つ

エンジンの最大出力絞りだし風にあらがひ八丈島へ

風つよき八丈空港に到着し乗客からわつとわきたつ拍手

雪積もる八丈富士はめづらしと島のひとびと口々に言ふ

高台の藍ヶ江港の足湯より風のむかうに鯨をさがす

風の海ほのかに霞みあこがれの島青ヶ島の島かげが見ゆ

ヒヨコヒヨコと長い胴体折り曲げて八丈島のイタチが走る

いにしへの遠き海より運ばれし玉石垣のつづく道ゆく

黒むつに目鯛と青背と尾長鯛一生分の島寿司を食む

明日葉とはんばのりとお土産に思ひめぐらす八丈島に